



## 鍼灸師の最大の武器

二〇〇六年一二月二七日の朝日新聞朝刊「オピニオン」欄に「鶴見俊輔さんと語る」という一面すべてを使った対談が掲載されていた。対談の相手は徳永進先生である。サブタイトルに「生き死に学びほぐす」とあるように、徳永先生は二〇〇一年から鳥取市内でホスピスケアの野の花診療所を運営、われわれ鍼灸師の間でも、『医道の日本』二〇〇六年八月号で「ターミナルケアと針灸」と題して、森ノ宮医療学園の尾崎朋文氏、野の花診療所の勤務鍼灸師・竹中浩司氏と対談していることで、広く知られるようになった医師である。

朝日新聞の同記事はとても興味深く読ませていただいたが、私的なことで一カ所、着目する内容にぶつかった。それは「対談の後 考えた」という鶴見氏の文章の冒頭の一節「一九七〇年、大阪で万博がひらかれた。その前年、大阪の大阪城公園に行くと反戦万博

があつて、そこに小屋がひとつあり、その前に二十歳ぐらいの青年が番をしていた。よく見ると小屋ははがきで張りつめられていて、ひとつひとつに、ハンセン病患者の望郷の思いが書いてあつた。この小屋の番人が徳永進で、京大医学部の学生だった。それから四十年、彼は当時の志を貫いて生きている」である。

じつは当時、大学四年だった私も反戦万博には東京から出向き、三日間、大阪城公園で野宿し、集会やデモに参加した。しかし、当時の自分を振り返ってみると、その視線はいつも政治や社会に向けられ、それを構成している人間に対する興味や意識はまったくなかったのではないだろうか。それが証拠に三日間、寝泊まりしながら、徳永先生の小屋を見た記憶がまったくないのである。また徳永先生のように早くから将来の目的を定め、それに向かつて突き進む姿勢など皆無ではなかっただろうか。そのときの自分にとって、まともな就職など土台無理な話であり、自分の将来について、ほとんどなにも考えていなかったのではないだろうか。本当のところ、フリーのライターぐらいしか思いつかなかったのである。

明治鍼灸大学を卒業されて、現在、京都大学大学院に在学中の伊藤和真先生が昨年（二〇〇六年）一〇月に京都から東京中医鍼灸センターまでわざわざ出向いてこられた。

伊藤先生のお名前は『中医臨床』でかねがね拝見していたが、お会いしたのは、この時がはじめてである。先生の研究テーマが「鍼灸師のガン患者に対する実践と意識」であり、そのことに関連した質問でいろいろな鍼灸師に聞き取り調査を行っているということとは事前のお手紙から承知していた。その日は一〇月の第一日曜日ということで、当センターの顧問である金子吉弥先生や当センター研修生の医科歯科大ドクターX先生などもその場に居合わせ、座談に参加して、話は大いに盛り上がった。二時間足らずの限られた時間で、どれほど伊藤先生のご期待に沿えたのか、はなはだ疑問であるが、金子先生のように、静岡市郊外の山間部の診療所で、病院から自分の家に戻ってきた患者さんの最後を看取る仕事に従事してきた医師の発言は、伊藤先生の質問に十分応えられる内容であり、横で聞いていた私にとってもじつに新鮮であった。彼は末期の患者さんで、もう治療の手立てが何にもなくなつたとき、じつと手を握って見送るのだという。気取りや気負いなどまったくなく、いつも笑みを浮かべ、日頃から花鳥風月を季語として俳句を嗜む自然体をもって患者さんに接する彼の姿は、まさに「南に死にそんな人あれば行ってこわがらなくてもいい」といふを彷彿とさせるものである。

翻つて、死を前にしたがん患者にどう接するのかといったことは、私のような開業鍼灸

師にはほとんど無縁のことではないだろうか。そこまで進行していないがんの患者さんとは何人もお付き合いさせてもらったが、結論的にいえば、がんを特化するような状況には置かれていないこともあって、私はがんと他の病気の区別をしていない。その点では東京まで来られた伊藤先生に無駄足を踏ませたような気がするが、私たちの仕事とは、がんだけでなく、その人のもつどのような苦痛に対しても、現代医学のさまざまな検査の数値の変化で判断するのではなく、本人が「ああ、軽くなったな」とか「良くなったな」と実感させることではないかと考える。その病症が命にかかわるか否かは私たちにとって問題ではない。要するに、他者からみればどのような些細な症状であっても、本人にとってそれが耐えられないような苦痛であるならば、その症状が生死にかかわるか否かに関係なく鍼灸師はその苦痛のいささかでも改善して、その人の生活領域を広げること全力をあげるべきだと考えている。そのことが結果的にその人の生きる希望の一助になれば、それは私たちの仕事を立派にこなしたことはないだろうか。

鍼灸師は医師と同じように医療と概括される世界にいるが、大方の医師とはだいぶ立場を異にする。最大の相違点は、鍼灸師はその人の話を聞き、身体を診、触ってその身体情報からさまざまなことを考え、その治療もその人の身体に直に接することで、病氣と立ち

向かおうとすることである。その身体情報は生死を決するものを含め、さまざまなことを私たちに教えてくれるが、それをそのまま患者さんに言うわけではない。改善できないような否定的情報は伏せてしまっただけでかまわない。喋らないことのほうがむしろ多いのである。医師が「大丈夫です」ということはなかなか勇気がいることである。身体プラス面だけでなくマイナス面も勘案し、その総合評価をしなければならず、さらには余命などという「神性」の領域に踏み込んだ発言まで求められるのであるから、それを見誤ったり、「大いなる嘘」をついたりした場合には現代社会では訴訟にもなりかねないのである。

とするならば、概して医師の発言が消極的であったり慎重になったりすることはやむを得ないことである。鍼灸師はそうした立場にはいない。したがって、その人のプラス面だけを強調してもそれは許されることである。それが仮に一パーセントであっても、それもまた真実なのであるから、その人に生きる希望を与えるものであれば、その部分だけを取り出してもなんら差し支えない。またマイナス面に対してもその人が日常生活のなかで改善できたり、鍼灸を通じた治療の手立てがあることしか言わなくていいのであり、それ以上は口を噤むことを良しとする。その点で鍼灸師は患者さんに対し、医師とは異なる接し方ができる業種なのであり、患者さんにとってそれが益となるならば、それを私たち鍼灸

師の最大の武器としてもいいのではないだろうか。



## 鍼灸師の目線

今年（二〇〇七年）二月、西田順天堂内科の西田皓一先生（高知県南国市）からご著書『東洋医学見聞録』上・中・下三巻（医道の日本社刊）が、お手紙を添えて私の所に送られてきた。早速、東京中医鍼灸センターに持って行き、書架に置いてみなどで回覧している。同書は一九九七年から雑誌『医道の日本』に連載されてきた同名のコラムを、ある程度の分量になったところで一冊にまとめ、上巻・中巻・下巻と、年を追って順次、刊行されてきたものである。今回、下巻が出版されたので、これで一応、完結の運びとなったので